



Title	キャリバンのゆくえ
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外大英米研究. 1992, 18, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99149
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キャリバンのゆくえ

正 木 恒 夫

シェイクスピアの作品に登場する人物の中で、キャリバンほどイメージを固定しにくい人物はないのではないかと思います。そもそも「人物」と言ってしまうてよいのかどうか。『あらし』のテキストの中では、キャリバンはまずプロスペローによって、悪魔が魔女に生ませた奇形児として観客に紹介されます。その奇形児を怪物に——見世物として商品価値のありそうな怪物に仕立てあげていくのは、道化のトリンキュローとステファノーですが、「怪物」といっても一体どんな姿をしているのか、一向に明らかではありません。テキストの中にはキャリバンを形容する言葉が、実に24種類、のべ71例に及びますが、その多くが罵りや蔑称ですから、それをのぞいてしまますと、テキストから確実に言えるのは、長い爪をもつこと・魚を連想させること・裸でないことの三つだけです。形容の過剰が、かえってイメージの定着を妨げていると言つてよいでしょう。しかも一方では、こうした怪物性にもかかわらず人間を——具体的には、中世以来ヨーロッパ文化の底辺にうごめいてきた野生人、あるいは新世界の居住者インディアンを連想させる要素もテキストにはあって、それがキャリバンの実体だと考えてきた人も少なくありません。『あらし』の上演史をみても、キャリバンは、怪物・気高き野蛮人・類人猿・両生類・植民地被抑圧民など、文字通り変幻自在という印象を受けます。¹⁾

こうしたイメージの動揺の一つの理由は、キャリバンという劇的形象の文化的な重層性にあるでしょう。少し単純化して言えば、魔女と悪魔の結合が生んだ奇形児キャリバンと、新世界の住民インディアン——中世以来ヨーロッ

正 木 恒 夫

パが培ってきた土着のイメージと、航海者や植民者の見聞がもたらす外来のイメージ——要するにキャリバンにおけるヨーロッパ性とアメリカ性の混在ということになります。このこと自体は、既にしばしば論じられてきたことです。例えば『あらし』という作品の中で、地中海と大西洋という二つの座標軸が交差していると言ったのはフィードラーですし、²⁾ ヒュームはキャリバンを、ヨーロッパ性とアメリカ性の妥協の産物とみています。³⁾

私はもう一つそれに加えて、複雑な文化的要素を劇のテキストに構成していく際の、シェイクスピア特有の方法が、イメージの動揺と混乱を、むしろ意図的にひきおこしているのではないかと思うのです。こうしたイメージのぶれは、いわば作品の構造的な特徴をなすものですから、それを無視してキャリバンを一元的にとらえようとしても、どうもうまいかないようです。例えばドライデンのキャリバン論（『トロイラスとクレシダ』改作への序文、1679）⁴⁾ といえは、『あらし』に関するもっとも古い批評の一つでしょう。これは一種のリアリズム論といってよいものですが、その中でドライデンは、キャリバンについて、一見不自然で大胆すぎるようにみえながら、実は、悪魔が魔女にはらませたという設定は、「けっして到底信じがたいというようなものではない。現に大衆はいまだにそれを信じている」と述べています。ドライデンはさらにケンタウロスの例をひいて、「人と馬との二つの姿から、人間の想像力はこの半人半馬の怪物を生みだした。それと同じようにシェイクスピアは、悪魔と魔女の姿から、キャリバンという怪物を作りだしたのである」とも言っています。その限りでドライデンは、キャリバンのアメリカ性を切り捨て、ヨーロッパの土着文化の中にとりこむことによって、イメージを固定したとすることができるでしょう。しかしドライデンは一方では、『インディアン皇帝』（1665）の草稿と、初版のある個所で、メキシコの支配者モンテスマに仕えるインディアンの高僧にキャリバンという名を与えていますし、⁵⁾ ダヴナントとの合作になる『あらし、あるいは魔法の島』（1667）では、新世界にまつわる表現の大半を原作から削除しておきながら、カニバリズム（というのはヨーロッパが描いた新世界像の重要な一部をなす

ものですが）への言及を（時には性的な意味を含ませて）五度もくり返しています。（「キャリバン」という名が「カニバル」のアナグラムだと、多くの人が考えていることは言うまでもありません。）批評の中ではキャリバンのイメージの固定に成功したドライデンも、劇作品を含めて眺めると、結局新世界への連想をたちきることができず、イメージの動揺を許してしまったと言わざるをえないようです。

もう一つ、現代の例をあげてみます。これは直接的にはプロスペローにかかわるものですが、プロスペローのあり方は必然的にキャリバンのあり方を規定しますから、私の主題をそれることはないはずです。ケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴは、初期の長編小説『一粒の小麦』（1967）の中に、民族運動を容赦なく弾圧するイギリス人植民地官僚トムソンを登場させます。トムソンはケニアでの体験を回想録にまとめようとするのですが、彼はそれに、「アフリカのプロスペロー」というタイトルをつけるのです。このことはもちろん、グギがプロスペローを植民地支配者として（従って当然キャリバンを被抑圧民として）とらえていることを意味します。この事実を指摘しているのはカーテリですが、⁶⁾そこから出発してカーテリが展開する議論を乱暴に要約してしまえば、プロスペローすなわち植民地支配者というグギの読みは、『あらし』が書かれた時点では誤読でありえたかもしれないが、その後の歴史的経過の中で正読に転化している、『あらし』が被抑圧民自身によって、植民地主義的言説の一部として読まれている以上、その内容は植民地主義的と言わざるをえない、ということになるのでしょうか。この議論を受け入れるかどうかは、要するに立場の問題でしょうが、唯ひとつ都合が悪いのは被抑圧民が、『あらし』を常に植民地主義的言説として読むとは限らないことです。ビルマのテイン・パー・ミンといえば、独立運動にも深くかかわったすぐれて政治的な作家ですが、その自叙伝（1974）によれば、⁷⁾イギリス支配下の高校時代に『あらし』を読んだ時、多くの人や霊を意のままに操る超能力者としてのプロスペローを、ビルマの伝統芸能に登場する行者とも重ね合わせて、英雄視していたと言います。こうした読みの中ではキャリバン

正 木 恒 夫

は、英雄プロスペローが支配する悪玉の一人となりはてます。『あらし』というテキストの、従ってキャリバンという形象の多義性が、こんな所にも顔をのぞかせているようです。

『あらし』を植民地主義的言説の中に位置づけようとする最近の、いわゆる新歴史主義的な論評は、その多くが、『あらし』のアメリカ的要素を暗黙の前提にしています。しかし一体『あらし』と新世界との関係は、それほど自明の、あるいは単純なものなのでしょうか。例えば冒頭の嵐にしても、マローンがそれを指摘して以来（1808）、ヴァージニア植民地にかかわる三つの文書からディテールを借りたと信じられてきました。私はもちろんそれを否定するつもりはありませんが、例えばストレイチーの『報告書』⁹⁾と『あらし』冒頭の場面を読み較べてみますと、目につくのは類似点よりもむしろ差異です。『あらし』では自然と雄々しく戦う船員たちに較べて、それを叱咤し罵るだけの貴族たちが、どうみても分が悪いのですが、それとは逆にストレイチーが描くシー・アドヴェンチャー号の貴族たちは、ゲイツ卿以下身を挺して嵐に立ち向かい、下級の船員に範を垂れます。この違いは何を意味するのでしょうか。また『あらし』の島の博物誌についても、かつてコーリーが同時代の航海誌などを博搜して、多数の類似点を発見し、新世界との密接な関係を立証したことになっています。⁹⁾もしそうだとすれば、主としてキャリバンによって語られる島の動植物層が、必ずしも新世界特有のものではない事実を、どう説明すればよいのでしょうか。例えばストレイチーの報告が特筆するヤシの木は、キャリバンの博物誌に登場しませんし、一世代前のハリオット¹⁰⁾が、ヴァージニア植民地での主食として推奨したトウモロコシが含まれていないのも奇妙なことです。それに何より気になるのは、ハリオットもストレイチーも、共に労働の必要を説き、農耕を生存の基礎にすえているのに、プロスペローがキャリバンに依存しつつ採集経済に甘んじていることです。もし『あらし』が何らかの形で新世界を描こうとしたものだとすれば、作者はその像を意図的に歪めているとしか考えられないのではないのでしょうか。

『あらし』のテキストの中で、従来新世界にかかわるとされてきた要素を、固有名詞から博物誌、さらには引用・状況・人物関係まで数えると、おそらく20をこえるでしょう。しかしその内容が抽象的になればなるほど証明がむずかしく（例えば「状況」と「関係」のレベルでの「土地収奪と原住民支配」、スクーラ¹¹⁾も指摘するように、反植民地主義的解釈を前提とした一種の循環論におちいる危険をはらんでいます。そこで不確実な要素をはぶいてしまいますと、最終的に残るのは、四つの固有名詞と一つの用語、それに二つの引用という、あわせて七つのケースです。そのひとつひとつを、新歴史主義者のいう歴史の「コン=テキスト」¹²⁾ではなく、ドラマのテキストの中に戻して観察してみますと、ある特徴が浮かびあがってきます。それは『あらし』の中で、新世界のイメージは、喚起されると同時にかならず消去されているという事実です。

この劇で最初に現れる新世界の固有名詞は、言うまでもなく、一幕二場の「バーミューダ」です。エアリエルが口にするこの地名は、よく言われるように、単にさいはての地の一例として使われているのではないでしょう。「風吹き波さわぐ」という形容詞と共に、直前の舞台を吹き荒れた嵐を逆照射して、それを新世界の地理学の中に位置づける役割をもはたしているはずです。（初演当時の観客なら、冒頭の場面の時事性に気づかなかった者も、「バーミューダ」と聞けば、シー・アドヴェンチャー号の遭難を思い起こしたかもしれません。）しかしこうして一瞬呼びおこされた新世界への連想も、同じセリフのわずか五行後で、あっけなく打ち消されてしまいます。なぜならそこでエアリエルは、「残りの船は...地中海の大海原を、ナポリに向けて悲しく帰路に」ついたことを報告するからです。^{a)}バーミューダから地中海へ——こうした観客の意識操作こそ、私の言う新世界イメージの自己消去なのですが、ミランダの有名な“brave new world”（V. i）というセリフも、この観点からとらえなおす必要があるでしょう。ミランダの言う「すばらしい新世界」が、実はそれほどすばらしくもない旧世界の貴族集団だったという。そこにアイロニーがこめられていることはもちろんですが、私は

同時に、「新世界」という言葉が、指示対象を失って宙づりにされていることが重要だと考えます。こうした指示対象の不在ないし消滅を、もっと大きな規模で、演劇的な仕掛けを使って実現したのが、三幕三場、奇怪な姿をした霊たちによって豊かに盛りつけられた食卓が、ハーピーに身を変えたエアリエルの登場とともに跡形もなく消え失せるという、あの有名な場面でしょう。ここで三人のイタリア貴族が次々に口走る言葉³⁾が、アイロニカルに誇張されてはいるものの、当時の航海者が時に抱いた新世界についての感想の、ほとんど引用に近いものであることは、それをローリーのガイアナ紀行の一節と較べてみても分かります。⁴⁾いかにも思わせぶりのセリフですが、一瞬の後には、セリフの対象そのものが物理的に消滅しますから、ここでもいったん作りだされた新世界への連想が、行き場を失って宙に浮いてしまいます。このような新世界イメージの喚起と消去という操作を、言語のレベルで行ったのが、これまた有名な二幕一場、ゴンザーローによるモンテーニュの引用です。⁴⁾モンテーニュが南米のインディオ社会を例にひいて展開するユートピア論を、ゴンザーローがフローリオ訳によって、ほぼ忠実に引用する、それをセバ스티アンとアントニオという二人の悪役が徹底的に揶揄するこの場面は、すでにしばしば論じられてきましたが、意外に気づかれていないのは、それら一連のやりとりが、ゴンザーローの発する“nothing”の一語によって、意味の焦点を失っていることです。新世界とその住民の発見が、ヨーロッパの知識人に深刻な衝撃を与え、その結果、ユートピア思想史に豊かな一ページをつけ加えることになったのは周知の事実です。ゴンザーローがモンテーニュを引用する時、一瞬プロスペローの島に、無限の可能性をひめた新世界の幻想が作りだされるかに見えます。しかしゴンザーローのユートピア論は、単に悪役たちによって茶化されるだけでなく、ゴンザーロー自身によって、その場限りのお笑い草、「よしなしごと」つまり“nothing”と規定されるのです。その時幻影は自己崩壊をとげます。これまた新世界イメージの喚起と消去というこの劇特有の方法の、典型的な応用例と言ってよいでしょう。

キャリバンのゆくえ

このようにみてきますと、『あらし』のアメリカ的要素は、けっして単なる時事性の担い手でもなければ、作品に彩りをそえるディテールの一部でもないことが分かります。そこには常にある種の屈折があり、しかも多くの場合、未知との遭遇に際して人間が抱く認識の不確かさにかかわって、存在そのものの危うさへの意識、さらにはある普遍的な虚構の意識につながっていくように思われるのですが、結論を急ぐ前に、こうした『あらし』特有の方法が、キャリバンにどう適用されているかを見ておかななくてはなりません。

私はこの話を、キャリバンにおける文化的重層性——とりわけヨーロッパ性とアメリカ性の混在ということから始めました。しかし劇のテキストをよく調べてみますと、キャリバンは果たしてそれほどアメリカ的だろうかという疑問が生じてきます。一幕二場での（ということは、プロスペローとの関係における）キャリバンをインディアンとみなすためには、土地収奪と奴隷支配という抽象度の高いレベルでとらえるほかなく、そうするとその歴史的妥当性について、カーテリのように⁶⁾居直るのならともかく、そうでなければスクーラが提出している数々の疑問⁷⁾に答えなくてはなりません。そうした疑問の余地のない、明瞭にアメリカ的なイメージがキャリバンをめぐって現れるのは、二幕二場、トリンキュローとの出会い以後のことです。⁸⁾しかしここでもイメージの喚起と消去という原理が、基本的には貫徹しています。まずトリンキュローの「死んだインディアン」というセリフは、いかにも思わせぶりですが、これはもちろんキャリバンが「死んだインディアン」ではないことを前提にしたセリフですし、マントからはみだした四本の足を見て一瞬「インドの野蛮人」を連想したステファノーも、すぐに気を取り直してそれを「怪物」と断定し、金儲けの胸算用をはじめます。キャリバンが道化たちを神と取り違えることと言い、キャリバンの博物誌に登場するマーモセットや、堰を利用した漁獲法と言い、インディアンへの連想をさそうアメリカ的な要素ですが、それらはいずれも道化たちによって徹底的に茶化され、または無視されます。それはまるでキャリバンが、インディアンとしてふるまおうとするのに、道化たちがそれを許さないかのようです。それでは一体道

正 木 恒 夫

化たちは、キャリバンをどうしようというのでしょうか。答えは簡単明瞭、彼らはキャリバンを怪物に仕立てあげようとしているのです。

私はかつて『あらし』の中では、キャリバンをめぐる二つの辞書が使われていることを指摘したことがあります。¹⁰一つはプロスペローのそれ——ここでは「奴隷」「悪魔」という語を中心に、キャリバンを悪と劣性の化身として断罪する倫理的な意味体系が形成されます。もう一つは道化たちのそれ——ここでは「怪物」「魚」という語を中心に、キャリバンを奇妙で陽気な見世物として利用しようという、ショー・ビジネス的な意味体系が形作られます。大切なのはこれら二つの辞書ないし語彙が、厳密に相互排他的であること、つまり一方の辞書が他方の人物または人物たちによって使われることが、けっしてないことです。（実は一つだけ例外があるのですが、それは完全に説明可能です。）これは次のことを意味するでしょう。一幕二場ではプロスペローによって、悪魔の申し子、陶冶不能の劣性として厳格に定義されていたキャリバンが、二幕二場でトリンキュローとステファノーによって怪物に仕立てあげられる時、次第にその輪郭を失いはじめます。なぜなら怪物というのは本来えたいの知れない代物、明瞭な定義を拒絶する存在であるからです。現にキャリバンを観察したトリンキュローは、そうした定義への努力を一切放棄してしまいます¹¹（34－5行）。つまりキャリバンの場合、新世界イメージの喚起と消去という方法が適用されているだけでなく、二つの異なる意味体系の間を移動させ、悪魔の申し子から単なる怪物に変身させることによって、イメージの拡散がいつそう意図的にひきおこされていると言えるでしょう。その意味ではステファノーが描く「足が四本に声が二つの」化け物——「頭の方では仲間をほめておきながら、お尻の方ではさんざけなしてご破算に」してしまう怪物（II, ii）こそ、『あらし』にみられる自己消去とはぐらかしの作劇法のエンブレムと言ってよいものです。

このようにみてきますと、『あらし』のアメリカ的素材は、植民地主義的言説の一部をなすというよりは、むしろ人間の認識の不確かさ、あるいは認識対象の存在そのものの不安定を表現するために、イメージの喚起と消去と

キャリバンのゆくえ

いう独特の仕掛けを施して用いられていると言えそうです。ヨーロッパがかつて経験したもっとも大規模な未知との遭遇である新世界体験を、シェイクスピアはそうのように利用した——それは結局『あらし』の重要なテーマである虚構ないし虚構意識の問題につながっていく、そしてここでもキャリバンが中核的な役割をはたしているように思うのですが、これについては、機会を改めて論じたいと思います。

(日本英文学会第62回大会——1990年5月20日、岡山大学——において口頭発表。)

(引用)

(『あらし』からの引用はリヴァーサイド版による)

a) Safely in harbor
Is the King's ship, in the deep nook, where once
Thou call'dst me up at midnight to fetch dew
From the still-vex'd Bermoothes, there she's hid;
...and for the rest o'th'fleet

(Which I dispers'd) , they all have met again,
And are upon the Mediterranean float
Bound sadly home for Naples.... (I. ii. 226-235)

b) *Seb.* ... Now I will believe
That there are unicorns; that in Arabia
There is one tree, the phoenix' throne, one phoenix
At this hour reigning there.
Ant. ... Travellers ne'er did lie,
Though fools at home condemn 'em.
Gon. If in Naples
I should report this now, would they believe me?

正 木 恒 夫

... When we were boys,
Who would believe that there were mountaineers,
Dew-lapp'd, like bulls, whose throats had hanging at 'em
Wallets of flesh? or that there were such men
Whose heads stood in their breasts? which now we find
Each putter-out of five for one will bring us
Good warrant of. (III. iii. 21-49)

c) There is also another goodly river beyond Caroni which is called Arui....Next unto Arui there are two rivers Atoica and Caura, and on that branch which is called Caura are a nation of people whose heads appear not above their shoulders, and their mouths in the middle of their breasts, and that a long train of hair groweth backward between their shoulders....Such a nation was written of by Mandeville, whose reports were held for fables many years and yet, since the East Indies were discovered, we find his relations true of such things as heretofore were held incredible....

d) *Gon.* All things in common nature should produce
Without sweat or endeavor: treason, felony,
Sword, pike, knife, gun, or need of any engine,
Would I not have; but nature should bring forth,
Of it own kind, all foison, all abundance,
To feed my innocent people.
Seb. No marrying 'mong his subjects?
Ant. None, man, all idle—whores and knaves.
Gon. I would with such perfection govern, sir,
T'excel the golden age.

キャリバンのゆくえ

Seb. 'Save his Majesty!

Ant. Long live Gonzalo!

Gon. And—do you mark me, sir?

Alon. Prithee no more; thou dost talk nothing to me.

Gon. I do well believe your Highness, and did it to minister occasion to these gentlemen, who are of such sensible and nimble lungs that they always use to laugh at nothing.

Ant. 'Twas you we laugh'd at.

Gon. Who, in this kind of merry fooling, am nothing to you; so you may continue, and laugh at nothing still. (II. i. 160-179)

e) Trin. ...What have we here? a man or a fish? dead or alive? A fish, he smells like a fish.... A strange fish! ...Legg'd like a man; and his fins like arms! Warm, o' my troth! I do now let loose my opinion, hold it no longer: this is no fish.... (II. ii. 24-35)

(注)

1) Vaughan, Virginia M., "Something Rich and Strange" : Caliban's Metamorphoses', *Shakespeare Quarterly*, 36 (1985).

2) Fiedler, Leslie A., *The Stranger in Shakespeare* (New York, 1972), chap. 4.

3) Hulme, Peter, *Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean, 1492-1797* (London, 1986), chap. 3

4) Dryden, John, 'Preface' to *Troilus and Cressida* in *The Dramatic Works*, 5, ed. M. Summers (London, 1932), pp. 21-2.

5) Loftis, J. and Dearing, V. A. (eds.), *The Works of John Dryden*, IX (California, 1966), p. 308.

6) Cartelli, Thomas, 'Prospero in Africa: *The Tempest* as a colonialist

正 木 恒 夫

text and pretext' in *Shakespeare Reproduced: The text in history and ideology*, ed. Jean E. Howard and Marion F. O'Connor (New York, 1987).

7) 南田みどり「『東より日出ずるが如く』における『デイヴィッド・コッパーフィールド』の影響について」『大阪外国語大学論集』改題第1号、1989。

8) Strachy, Wil., 'A true reportorie of the wrack... July 15. 1610.' in *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes*, XIX (Glasgow, 1906).

9) Cawley, Robert Raston, 'Shakespeare's Use of the Voyagers in *The Tempest*', *PMLA*, 41 (1926).

10) Harriot, Thomas, *A briefe and true report of the new found land of Virginia* (1588) in *Virginia Voyages from Hakluyt*, ed. David B. and Alison M. Quinn (Oxford, 1973).

11) Skura, Meredith Anne, 'Discourse and the Individual: The Case of Colonialism in *The Tempest*', *Shakespeare Quarterly*, 40 (1989).

12) Barker, Francis and Hulme, Peter, 'Nymphs and reapers heavily vanish: the discursive con-texts of *The Tempest*' in *Alternative Shakespeares*, ed. John Drakkis (London, 1985).

13) Raleigh, Walter, 'The discovery of the large, rich, and beautiful empire of Guiana...' in *Hakluyt: Voyages and Discoveries*, ed. Jack Beeching (Harmondsworth, 1972), p. 402.

14) Masaki, Tsuneo, '*The Tempest*: A Shakespearean Approach to a Cultural Clash', *Shakespeare Studies* (Japan), XIV (1978).